

エッセイスト 近藤 節夫



機上から見下ろすクスコの街

マチュピチュの旅は、古都クスコに始まりクスコに終わる。15世紀のインカ帝国の遺跡である世界複合遺産マチュピチュは、1911年に発見されるまで廃墟だった。現在マチュピチュへの玄関口は、世界文化遺産のクスコである。海拔150mの首都リマから一足飛びに空路到着したクスコは、3,400mの高地にあり、やや空気が薄くホテルには、酸素吸入器が備えられている。このクスコはかつてインカ帝国の首都だった。

今日も魅力的な史跡の街として外国から多くの観光客が訪れる。インカ時代には国のあらゆる儀式が行われ、街の中心・アルマス広場は地方への起点ともなっていた。郊外へ足を延ばせばアルパカの姿も見られる。広場へ向かう道路の左右に大きな石を積んだ壁は、インカ皇帝の宮殿跡で精緻で重厚な石組みが今日では宗教美術博物館の礎石になっており、インカ文明の歴史の重みを感じさせてくれる。



アルマス広場と  
集落を結ぶ窮屈な路地

このクスコからペルーレールに乗車して、3時間で海拔2,280mのマチュピチュ駅まで来ると、つい登ってきたような錯覚に陥るが、意外にもクスコから列車はマチュピチュへ向けて1000m以上も下って来たのである。ここは温泉の出ることでも知られるが、ここマチュピチュ村の初代村長は、何



マチュピチュへの途中駅

と福島県出身の日本人野内与吉だった。途中車窓から眺める牧歌的な景色は、物売りに立ち寄る民族衣装をまとった女たちの立ち居振る舞いとともに関心を惹かれる。

マチュピチュ駅からバスでつづら折りを上り切った地点からしばらく歩くと、「最も訪れてみたい世界遺産」として人気のマチュピチュの幻想的な遺跡が忽然と目の前に現れる。

正に「空中都市」の面目躍如である。遺跡は神殿と住民の居住区に分かれて、その下の斜面には段々畑の棚田の跡が整然と残されている。石で積まれた建造物は、一分の隙もなくその精密さは、数百年が経った今日でも当時の精密な技術を偲ばせてくれる。上空をコンドルのつがいが飛び去ることもあり、大きなロマンを感じさせてくれる。



マチュピチュ

山中の断崖のような高地にどうしてこのような要塞都市が建設されたのか、アンデス文明が独自の文字を持たなかったため今も謎である。明らかに高度な文明により繁栄したマチュピチュでインカの人々が、僅か80年ほどしか生活せず放置して、奥地へ移り住んだことももう一つの謎とされている。

帰りの駅までのバスの旅がこれまた無邪気に楽しい。バス



クスコ郊外のインカ宮殿跡

は樹木の間を通り抜け、急坂を蛇行して下る。カーブでスピードを落とす都度物売り少年が外からバスの乗客に声をかける。よく見るとさっき物売りしていた少年ではないか。バスは13のヘアピンカーブをジグザグで下るが、物売り少年らはバスが通り去るや否や真っすぐ走って下り、先にバスを待ち受けているのだ。これを何度もやっているのだから、乗客ともすっかり顔なじみとなり、挙句には少年たちからお土産品を買わされる羽目になる。



駅でへたり込む物売りのおばちゃん